

1 事業名 平成28年度教育事業 「体験の風をおこそう」運動協賛事業
通学合宿「テンちゃん一家の一週間」

2 趣 旨

日常の家庭生活とは切り離れた環境で、異なる学校・学年同士での共同生活や学習活動を行い、人と関わる力や集団生活のマナー、基本的な生活習慣の育成を図るとともに、中1ギャップ解消を目指す。

3 期 日 平成28年11月20日(日)～11月26日(土)

4 参加者 滝沢市立滝沢第二小学校・滝沢東小学校 5～6年生 39名

※参加人数の内訳

学校名	参加人数	5年	6年	男子	女子
滝沢第二小	26名	8名	18名	15名	11名
滝沢東小	13名	7名	6名	4名	9名

5 連携・協力 滝沢市教育委員会、滝沢市立滝沢第二小学校、滝沢市立滝沢東小学校
岩手日報社、盛岡大学

6 内 容

(1) 日 程

日	月	火	水	木	金	土
11月20日(日)						
11月21日(月)	6:15	6:45	7:30	通学中		
11月22日(火)	6:15	6:45	7:30	通学中		
11月23日(水) 勤労感謝の日	6:15	7:00	8:00	11:00	12:00	13:00
11月24日(木)	6:15	6:45	7:30	通学中		
11月25日(金)	6:15	6:45	7:30	通学中		
11月26日(土)	6:30	7:00	8:20	8:45	9:20	10:30

(2) 指導者

- ・国立岩手山青少年交流の家職員・法人ボランティア【生活・学習指導全般、交流の時間の指導】
- ・岩手日報社 編集局 読者センター 多田 比呂子 氏【まわしよみ新聞の指導】
- ・盛岡大学 教授 市原 常明 氏, 教授 高城 靖尚 氏, 教授 市川 洋子 氏【大学講義対応】

(3) 企画のポイント

滝沢市立滝沢第二小学校・滝沢東小学校の二校の児童は、中学生になると滝沢市立第二中学校

で一緒に学校生活を送るようになる。そうした中学校に向けた交流や仲間作りを意識しながら、交流の家を拠点として一週間の共同生活を送る。今年度はより中学校での生活を見直し、昨年度までの4～6年生の募集から5・6年生の高学年に絞って参加者を募った。実施にあたっては、二校をそれぞれ訪問し、児童の様子や宿題の内容、各学校との日程調整等を行い、登校・下校の協力を得ながら連絡を密にして企画を進めた。

規則正しい生活及び家庭学習の習慣を形成するために、時間を意識して行動することを心がけさせ、そうした取組が、通学合宿が終了した後も取り組んでいけるように、日々の生活を見直し、これからの生活に生かしていけるように、家訓としてまとめ上げ、具現化を図ることに重点を置いた。今回、期間中に休日が入るので、1日の過ごし方を工夫し、日常の活動もしっかりと行いながら、新聞に親しむ活動や近隣の大学を見学する活動も取り入れた。

また、人とかかわる力や集団生活のマナーを学びながら、意欲を持続させるために日替わりの「学習・交流」の時間を設定し、職員と法人ボランティアが担当した。

調査研究として、参加小学生に対して事業前後にアンケートを実施した。また、保護者に対しては事業後にアンケートを実施し個々の変容や事業の有効性を探るよう企画した。

(4) 広報のポイント

年度初めに各学校を訪問し、校長、副校長、教務主任等に事業の趣旨や内容の説明と広報を行った。事業1ヶ月前には5～6年生にチラシを配布した。滝沢市教育委員会や報道機関へ開催要項とチラシを送付し、本事業開催についての広報を図った。

(5) 運営のポイント

一週間をとおして決められた生活リズムと時間を意識した行動ができるように、基本的な生活習慣を身につけることに重点を置いた活動プログラムを工夫した。また、色々な人からの影響を受けながら活動や生活できるように、二校のバランスや学年、男女を考慮して、1グループ6～7名の6班を編成した。学生のボランティアスタッフは、各班にリーダーとして配置した。またきめ細やかな対応ができるように2班ごとに統括リーダーを置き、さらにボランティア全体をまとめる統括チーフ1名を配置した。(組織図参照)各班には児童たちの活動が自発的なものになるための工夫として、毎日の活動の最後に「ふりかえり活動」を設け、模造紙に児童たちの思いや生活の中で気づいたことを書き込ませるビーイングを取り入れ、思いや考えを見える形で積み重ねた。最終日前日の夜に一週間をかけて書き込まれたビーイングから、個人の思いや考えをグループの話し合いをもとに整理し大切な言葉を組み合わせながら、これからの生活の中で生かせる「家訓づくり」としてまとめる活動を取り入れた。

一週間をとおして班での活動が中心になることから、初日から最終日までの学習・交流の時間は、班員がまとまって行動し、協力して活動できるものを行った。コミュニケーションをとりながら楽しむ「館内オリエンテーリング」、「アドベンチャープログラム」やボランティアが企画したレクリエーション「ドッジビー大会」、グループオリジナルの「缶バッチづくり」、知的好奇心を刺激する「星空観察」など、様々な体験活動を行いながら仲間とともに毎日を過ごした。今回、一週間の日程の中に勤労感謝の日があり、休日を過ごす中で、洗濯や清掃に取り組むことで各自の生活環境を整える活動や岩手日報社の協力を得て新聞に親しむ「まわしよみ新聞」、大学生との交流を図りながらの「盛岡大学見学」など、休日を活用した取組も行った。

健康面における配慮として、健康観察は朝と就寝前に行い、体調や排便の有無、薬の服用について聞き取りをするとともに、必要に応じて学校と連絡を取り合った。また、登下校時の安全確保通学バスにはボランティアスタッフが同乗し児童の掌握及び乗下車時の安全確保を行った。

児童の就寝後にスタッフミーティングを設定し、共有すべき内容や児童への対応に関する悩みを出し合い、その対策を話し合う場とした。その後の個々の「ふりかえり活動」も含め、短時間で効率よく実施することでスタッフの睡眠時間を確保した。

7 成果とその普及

合宿の前半は、集団や班を中心とした活動プログラムを組み込んだので、参加した児童たちはすぐに班のメンバーやボランティアスタッフと打ち解けることができ、「一緒にいろんなことをして楽しむことができました。友達もいっぱいできてよかったです。」「初めて参加して、最初は緊張していたけど、だんだん楽しくなって、なれていきました。食事はおいしかったし、活動もおもしろいし、いろんなことをして楽しかったです。」という感想から、良好な仲間作りを構築することができた。さらに、テレビやゲーム機、スマートフォン等、普段の生活の中で使っているメディアから1週間離れても、仲間と過ごすことに楽しみを感じられたことは大きな成果であったといえる。

家庭学習の習慣を形成において、時間を意識して行動することを心がけさせ、一週間の通学合宿の期間中、下校バス到着後すぐに家庭学習の時間を設定したことにより、落ち着いて学習に取り組む姿が見られた。児童からも「分からない勉強を教えてくださいありがとうございました。」「宿題はテレビを見ながら2時間かかっていたが、集中してやると1時間で終わった。家でもテレビを消してやりたい。」という感想が聞かれた。また、新聞に親しむ活動に取り組んだことで、積極的に文字に親しみ、知的好奇心を高めることができた。

生活に関しては、「衣・食・住」を自らの力で取り寄せたことにより、「みんなと暮らせて布団のたたみ方などが分かった。」「お風呂や食事など、家でやっていることを大勢でやっても楽しいと思った。」という児童の声が聞かれた。また、集団生活の約束事を「家訓」として提示し、「ふりかえり活動」は職員が交代で指導を行うことで話し合いに変化をもたせ、活発な意見交換につながった。ねらいとしている、基本的な生活習慣の定着を図るための意識付けとなった。

今回、グループワークを中心としたプログラムを行うことで人と関わる力の高まりが見られた。活動をとおして自分から積極的に仲間と関わる姿も見られ、他者とのコミュニケーション能力の高まりが感じられた。他の学校の人と仲良くなれてうれしかったという感想も多数あり、中学校に向けた交流や仲間作りの意識化を図ることができ、「中一ギャップ」解消に向けた一助となったと考える。

8 今後の課題

基本的な生活習慣を図る意味で、時間を意識して生活するように心がけさせたが、朝の時間など、慌ただしく過ごしてしまうことが時々見られた。グループ内では時間を意識して行動している様子も見られたので、活動に余裕をもち、個人及びグループで考えながら生活できるサイクルを構築していく必要があると感じた。また、「中一ギャップ」解消に向けた取組として、中学校と連携することで、事業の成果を探っていきたい。さらに、参加児童とその保護者のアンケートは、過去のデータと照らし合わせながら累積を行い、事業の成果を広めるとともに今後の事業計画、運営に活かしていきたい。



帰所後の学習をしている様子



話し合いの様子



グループごとの家訓発表

【テンちゃん一家の一週間 組織図】

